氏　　名	後藤　亮平
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	博甲第　8282　号
学位授与年月	平成　29 年　3 月　24 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	急性感染症による入院中にリハビリテーションを実施した高齢患者を対象とした ADL 予測要因の探索
主　　査	筑波大学教授　博士（医学）　人見　重美
副　　査	筑波大学准教授　博士（保健学）　柴山　大賀
副　　査	筑波大学講師　博士（医学）　際本　拓未
副　　査	筑波大学講師　博士（医学）　中馬越　清隆

論文の内容の要旨

後藤亮平氏の博士学位論文は、急性感染症で入院した高齢者を対象に、退院後の日常生活活動（ADL）が低下するのはどのような因子を持つ者かを調査したものである。その要旨は、以下の通りである。

（目的）

高齢者は、肺炎や尿路感染症などの急性感染症で入院することが多い。急性感染症は、運動機能や ADL 低下に直接結びつくことは少ないが、実際には、患者の退院後 ADL は低下することが多い。退院後も患者の ADL を低下させないことは、患者の生活の質の維持および医療費の抑制につながる重要な課題である。本論文は、急性感染症で入院し、入院中にリハビリテーションを実施した高齢者を対象に、退院後の ADL 低下を予測させる因子を明らかにすることを目的としている。

（方法）

著者は 2014 年 6 月 20 日から 2015 年 6 月 19 日の間に、ある一病院の一般病棟に入院した 65 歳以上の患者のうち、主治医が肺炎・尿路感染症等の急性感染症を主病名として診断し、入院中にリハビリテーション専門職がリハビリテーションを実施した者を対象に、前向きコホート研究を行っている。ADL のレベルは、Katz index を使用して①入院 2 週間前②退院時③退院 6 ヵ月後（電話による半構造化インタビュー）の 3 時点で評価した。患者基本情報（年齢・性別・診断名・Charlson comorbidity index（CCI）・家族構成など）に加え、退院時には、運動・認知機能（握力・short physical performance battery（SPPB）・6 minutes walk test・mini-mental state examination）を評価した。退院 6 ヵ月後に ADL が自立している群（自立群：Katz Index が 6 点）としていない群（非自立群：Katz Index が 5 点以下）について、ロジスティック回帰分析を用い、患者が非自立群に属する予測因子を検討した。研究を始めるに当たっては、実施施設の倫理委員会の承認を得ている。

（結果）

著者は 131 症例（平均年齢 81.5±6.7 歳、女性 69 例）を調査した。入院時の診断名は、肺炎 70 例、胃腸炎 24 例、尿路感染症 14 例、胆管炎 8 例、敗血症 5 例、気管支炎 4 例、蜂窩織炎4 例、インフルエンザ 2 例だった。退院時および退院 6 ヵ月後の Katz index が入院 2 週間前と比べて低下していたのは、それぞれ 55 例（42%）および 29 例（22%）だった。退院 6 ヵ月後における ADL 非自立を予測する独立した因子は、CCI が高いこと（odds 比：4.2、95%信頼区間：1.2-15）、および退院時の SPPB が低いこと（odds 比：0.51、95%信頼区間：0.36-0.72）、の 2 つだった。
結　論：本研究の結果から、併存疾患が多いこと、および退院時に下肢機能が低下していることが、退院後の ADL 低下を予測する因子であることが明らかになった。このことは、今後これらの点を考慮したリハビリテーション層別介入を行うことで、急性感染症で入院した高齢者に退院後も自立した生活を送らせることができる可能性を示している。

審査の結果の要旨

（批評）

超高齢化が進む本邦において、どうすれば高齢者が健康な日常生活を送れるかということは、大変重要な研究課題である。このため、高齢者の ADL を低下・維持・改善させる要因について、今までにも様々な研究が行われている。しかし、急性感染症など内科系疾患で入院した高齢者を対象とした研究は珍しく、本研究のオリジナリティは高いと考える。

本研究は、急性感染症で入院した高齢者では併存疾患が多いあるいは下肢機能が低下していると退院後の ADL が低下する可能性が高いことを示した。リハビリテーションを行うに当たってあまり重要視されない疾患であっても複数併存している場合は退院後の ADL 低下に繋がること、下肢機能を維持することが ADL 維持に重要であること、を明らかにしたことは大変意義深い。またこれらの結論は、どのような患者サブグループに重点的なリハビリテーション介入を行うことが効率的か、という今後の研究を進める上での重要な基礎情報になりうる。

著者は、内科疾患で入院した高齢者に対する効果的なリハビリテーション介入に関する副論文を 1 編提出している。このことから、著者は、本テーマに関して世界の研究動向を含めた十分な知識を持ち、今後の研究を主体的に計画・遂行できるだろうと推測する。

平成 28 年 12 月 26 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席の元、論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。